様式２

平 成 23 年 度　自 己 評 価 表（分掌）

鳥取県立鳥取養護学校

中長期目標（学校ビジョン）	安心、支え合い、学び合いのあふれる学校 ～児童生徒一人一人が自らの力を発揮しながら安心して学び、関係機関とつながり合って幸せに生きるための舞台づくりをする学校～

今年度の重点目標	
	１．安心して学べるための環境づくりに努める。
	２．支え合い、つながりあう体制づくりに努める。
	３．豊かな生き方をめざしたキャリア教育を推進する。
	４．自己の授業を見直し、授業改善を行う。

年度当初					評価結果（３）月		
評価項目	評価の具体項目	現状	目標（年度末の目指す姿）	目標達成のための方策	経過・達成状況	評価	改善方策
１．安心して学べるための環境づくり	（保健部） 緊急時を念頭に置いて訓練に取り組み、素早く、正確な対処ができる。	毎年度訓練を行っているが、教職員が素早く、正確な対処ができるための知識と技能に差がある。	学校の教職員が、緊急時を想定して素早く、正確に対処ができる集団になっている。	訓練で出た課題をどう解決すべきかを討議する時間を設け、緊急時対応の正確さを高める。	・各学部から救急ウィークで出た課題について保健部で話しあい、環境改善を行ったが、全員の認識には至らなかった。	C	・災害時や救急時の対応について、情報を職員に積極的に発信する。
	学校看護師や医療機関の指導と協力を得て、安心安全な学習の環境を整える。	学校看護師や医療機関からの情報を活かし、予見して事前に環境を整える必要がある。	関係者との連携や指導のもとに、環境改善している。	学校看護師や医療機関の指導やヒヤリハット事象から学習環境の改善を提案する。	・ヒヤリハット０レベルの報告があがるようになり、教員の意識が高まってきた。 ・環境改善に向けて、教員間の連携に改善の兆しがみられ出した。	B	・今後も職員間の連携を図り、改善事例を広める。
２．支え合い、つながりあう体制づくり	（総務部） 「保護者と教職員の会」の充実を図り、保護者と協働で学校教育を進めるための基盤をつくる。	保護者と担任とのつながりは強いが、保護者同士のつながりや学校と協働していく体制づくりは十分とはいえない。	保護者同士の関係が広がり、学校教育活動に協力している。	PTA活動や参観日等に出席しやすい体制を作り、参加者を増やす。	・たくさんの魅力的な教養講座を開くことで参加者が増えた。 ・通信を発行し、会員に行事の様子を知らせた。	B	・今後とも、魅力的な講座や参観日を設定し、参加者を増やし、協同体制を作る。
	情報発信の仕方を工夫し、鳥養の教育に関心を持つ人を増やす。	学校行事や公開週間で本校を訪れる関係者が固定化し、本校の教育を知る人が限られている。	本校の教育について知る人が増え、公開週間等で学校を訪れる人が増えている。	学校活動の案内を、ボランティアサークル、公民館、民生委員等学校関係者以外にも拡大したり、報道機関を利用したりして、情報を広める。	・行事案内の配布先を広げたり、ホームページの更新や報道機関への情報提供などを行ったが、来校者数の増加には結びつかなかった。	D	・保護者や教職員に情報発信の大切さの理解を求めながら、情報提供の場を広げたり、発信を工夫したりする。
	（自立活動部） 同じ障がい種の特別支援学校や療育園との連携を深め、本校の病弱・肢体不自由教育の専門性を高める。	他校との連携が進んできているが、それらの情報を活かして、教職員の専門性を高めるまでには至っていない。	自立活動に関する通信や他校との連携で得た情報を、実践に活かす教職員が増える。	他校や療育園から得た役立つ情報を教職員に積極的に伝え、専門性の向上に活かす。	・研修会や勉強会を持つことによって他校や関係諸機関との連携が進み、教職員の意識が変わりつつある。	C	・自立活動だよりの執筆者や勉強会での発表者を計画的に依頼し、専門性を活かした指導の実践者を増やす。
	（地域・教育支援部） 学校の支援を関係する施設・機関につなぎ、児童生徒の社会生活が豊かなものになるように努める。	豊かな社会生活のために他機関に支援方法を伝え、共有していく必要を感じる。	保護者・学校・関係機関の支援がつながり、豊かに生活している。	個別の支援会議等、保護者や関係機関と連携する機会を設けるよう働きかける。	・保護者や関係機関から寄せられた支援会議の有効性や満足感を伝えたことで、他の保護者の意識が変わってきた。	B	・保護者の困り感に応えて支援会議につなげる教員を増やす。
３．豊かな生き方をめざしたキャリア教育の推進	（全体） 児童生徒の卒業後の豊かな生活や可能性の伸長をめざしたビジョンの実現を保護者と一緒に進めていく。	担任と保護者が卒業後の豊かな生活をめざし、同じ目的意識をもって語ったり、行動したりするまでには至っていない。	担任と保護者が卒業後の豊かな生活のために今何をすべきかを一緒に考え、同じ目的意識をもって行動している。	担任と意識や課題の共有を図るために、①施設見学、②施設利用体験や職場体験、③子どもの明日を考える会、に多くの保護者が参加するように働きかける。	・担任だけでなく級外の教員も保護者の参加を働きかけた。そして、参加を呼びかけたり参加後の感想を聞きとったりする中で、保護者と意見を交わすことができた。	B	・今後とも、キャリア教育に関する行事の参加を呼びかけたり、参加後の感想を聞き取ったりして、相互理解を深める。
	（地域・教育支援部） キャリア教育研修会などを通してキャリア教育の考え方（捉え方）を理解し、実践に生かす。	学部や個人によって、キャリア教育に対する捉え方や実践に違いがある。	生き方教育としてキャリア教育を捉え、意識して実践に取り組む。	教職員が学校教育全体を通してキャリア教育を考えることができるよう、評価シートを作成して活用する。	・キャリア教育の参観日を実施したが、評価シートの利用までは至らなかった。	D	・評価シートの利用を検討しながら、キャリア教育視点の学習を年間に位置付ける。
４．自己の授業を見直して、授業改善	（研究部） わかる喜び・できる喜びのある授業をめざして、授業の改善と充実に努める。	授業改善のポイントが職員に十分伝わっていないため、授業の改善まで至っていない。	明確になった改善ポイントを活用して、日々の授業改善を行っている。	各学部ごとに明確になった授業の改善策を活用して、日々授業改善をしている。	・全体での授業研究会や学部での授業公開、授業研究会により、授業改善ポイントが明確になり、授業改善も進んできている。	C	・授業改善に役立つ講師を招聘したり、他校の授業を見学したりして、授業改善を進める。
	（文化情報教育部） 情報機器、視聴覚機器の効果的な活用を推進し、わかる授業や魅力ある授業を実践する。	情報機器や視聴覚機器の効果的な活用に差がある。	学習のねらいに合わせて効果的に情報・視聴覚機器を活用した学習を実践している。	情報機器活用研修会や機器に関する日常的な情報伝達を行い、授業での効果的な活用についてのアドバイスや実践紹介を行う。	・情報機器を学習に取り入れ効果的に活用しようとする教員が増えつつある。	B	・情報教育の研修及び実践紹介を継続して行うことで、授業での情報機器の効果的な活用を目指す。 ・授業研究会で話し合う視点に、視聴覚機器の効果的な利用を入れる。

評価基準　A:十分達成[100%]　B:概ね達成[80%程度]　C:変化の兆し[60%]程度　D:まだ不十分[40%程度]　E:目標・方策の見直し[30%以下]